シュテファン・ヘラーのピアノ曲
＜花と果実と茨の画＞作品 82

－ロマン派ピアノ音楽の一側面－

谷　村　　晃

1

ロマン派の音楽といえば，誰でもショパンやリスト，あるいはヴァーグナーの華麗な音楽を思い浮かべるが，果たして 19 世紀ヨーロッパの音楽文化は，これらのいわゆるロマン派の巨匠達の世界に尽きるものであろうか。ロマン派の音楽は，17，18 世紀に栄えたバロック及び古典派の教会及び宮廷の文化の延長線上に開花した新興市民の多彩な音楽である。そこでは聴衆を魅了するアクロバティックな名人芸から，聞き手の胸に忍び寄る密やかな囁きに至るまで，実に多様な音楽が生み出された。名人芸的に派手な音楽は，その演奏効果のために今日も多くの演奏会のプログラムを賑わせているが，より地味で，真の意味でロマン派的，心情告白的な音楽の多くは，人々の趣味の変化とそれに伴う音楽の音量，音質の変化のためにいつしか演奏会のレパートリーから姿を消してしまった。

本稿で取りあげるシュテファン・ヘラーは，ショパンにも比肩し得る魅力的なピアノの詩人であり，シューマンのダヴィッド同盟の仲間であった。160 曲を越すピアノ作品を書き，ピアニストとして，またピアノ教師として活躍したヘラーは，19 世紀の音楽文化を考える上で決して見落としてはならないロマン派の音楽家の一人である。にもかかわらず今日，彼の作品が演奏会の曲目に加えられことは滅多にない。残念である。のみならず，今日彼の作品の印刷楽譜を入手することも極めて困難である。表 2 の備考覧に，筆者が国立音楽大学図書館，大阪音楽大学図書館，英国図書館原報提供センター（BLDSC）の協力により入手することができた貴重な資料（コピー）及び現在入手可能な版とその番号を示しておいた。現時点で筆者の手元にあるのはヘラーの作品全体の 3 割余である。ここに改めて資料を提供して頂いた諸機関に感謝の意を表する次第である。

本稿では，彼のピアノ作品のなかでも，ひときわ魅力的で，また彼の代表的作品の一つと考えられる＜花と果実と茨の画＞（別名＜眠られぬ夜＞）作品 82 をとりあげて，そのロマン派音楽としての特質を究明してみた。また，この内容の一部は，平成 5 年 7 月 2 日（金）開催の大阪芸術大学藝術研究所主催の第 1 回教員研究会において，筆者自身のピアノ演奏により発表された。

ロマン派のピアノ音楽は，ピアノの響きにこだわる音楽である。それはピアノの楽器としての性能の拡充・改良と連動していた。当時のピアノは，今日の圧倒的な音量とパンチの効いた打楽器的な響きを誇る巨大なフル・コンサート・グランドピアノとはかなり違ったものであった。当時は，打鍵弦楽器としての和弦の暖かさと，倍音に富んだ豊かな響きを特色とする中型のグランド・ピアノが主流であった。上述の教員研究会では，当時のピアノの響きを想定して，中型のスタインウェイのグランドピアノを古典調律（1）に調律し，最近開発されたピアノの音を格段に良く響かせる効果のあるクラビベースを使用して，一種の復原演奏を行った。このような工夫によってヘラーのピアノ作品の繊細な響きのニュアンスをある程度再現できたものと思う。もっともこうした問題は，演奏する側はもちろんのこと，聞く側にも細やか

な感受性と音楽文化に対する深い理解が要求される。

2

シュテファン・ヘラーは1813年5月15日ペストで生まれ，1888年1月14日，パリで亡くなったハンガリー生まれのフランス人で，ピアニスト，ピアノ教師，作曲家としてドイツ，及びフランスで活躍したロマン派の音楽家である。彼は1810年生まれのショパン，シューマン，11年生まれのリスト，13 年生まれのヴァーグナー等と同時代の音楽家である。

彼が生きた時代は，フランス革命からナポレオンの台頭と失脚という一大動乱の18世紀末が過ぎ去り，ウイーン会議と神聖同盟によって象徴される反動体制の下での繁栄の時代である。それはヨーロッパの近代資本主義的市民社会の爛熟した，いわゆる古き良き時代である。しかし日常生活の安定とは裏腹に，近代資本主義社会の矛盾がさまざまな形で露呈し始めた時代でもある。このような状況のなかにあって，個人と社会の関係は極めて緊張に富んだものとなった。政治の面でも，社会制度の面でも，経済活動の面でも，さらには学問，芸術，教育といった文化の面でも，個人と社会の関係をめぐって激動の嵐が吹き荒れた。近代資本主義的市民社会のなかで葛藤する個人の意識がロマン主義運動となって展開されたのである。19世紀のいわゆるロマン派音楽もこうしたロマン主義運動の高揚の典型的な事例として捉えられるであろう。

そこで，いささか図式的ではあるが，ロマン派音楽の特質を，個人としての音楽家が爛熟した19世紀の社会と対決する姿勢の問題として考えてみると，そこにはおよそ5つの型が考えられる。第1の型は，自己顕示型である。例えばリストは，その有名なピアノ曲＜ラ・カンパネラ＞で，ヴァイオリンのヴィルトゥオーゾ（名手）であったパガニーニの音楽をピアノに編曲して，ピアノの鍵盤上をこれ見よがしに走り回る。リストは，自己のピアノ演奏技術を売りものにして，まるで征服者のように聴衆の前に立ち現れる。その外向的，英雄的姿勢こそは，聴衆を魅了するロマン派音楽の典型である。そこには強大な社会に，いわば自分の腕一本で立ち向かおうとする音楽家がいる。それはいわば自己顕示型の社会との対応である。

第2の型は，誇大妄想型である。ベルリオーズの＜幻想交響曲＞やヴァーグナーの一大総合芸術としての楽劇の世界がまさにそれである。ヴァーグナーの＜タンホイザー序曲＞等では，音楽は自分自身を芸術による救世主ないしは教祖に仕立てるための装置であり，そこでは救済の対象は現実世界を越えて，非現実の世界にまで広がる。そのカリスマ的姿勢にはプロパガンダとしての標題が不可欠なのである。

第3の型は，夢想型である。自己顕示型や誇大妄想型もときには現実を越えて夢の世界にさまようが，基本的には内なる自己を外に発散させようとする。これに反して夢想型では，意識は内面世界に向けられる。シューベルトの＜未完成交響曲＞の第2楽章冒頭のバス声部の8分音符，ピッチカートのゆっくりとした下降には，主観的内面世界への深い沈潜ないしは現実逃避から生じる独特の気分が支配している。それはシューベルト節や＜魔弾の射手＞のヴェーバー節や＜フィンガルの洞窟＞のメンデルスゾーン節となってわれわれを魅了する。そこには，最初の数小節が鳴り響いただけで人をロマンティックな夢の世界に誘い込んでしまう麻薬的な効果がある。まさにそれは現実逃避の夢幻の世界である。

第4の型は，望郷型である。錯綜する近代都市生活のなかで立ち往生する孤独な個人が求めるものは，有形無形の故郷や民俗的，民族的連帯の意識である。例えばドヴォルザークの＜スラヴ舞曲＞や＜新世界＞では，癖のあるリズムとボヘミアの旋律が，自国民のみならず多くの他国民にも精神的拠り所としての故郷を感じさせる。ブラームスやマーラーの音楽に見られる民謡への依拠もこの型と考えることができる。

第5の型は自意識過剰の感情移入型である。この型の音楽は内省的，自己分裂的で，地味で，単純なように見えて極めて理解しにくい。この型の音楽家は社会に背を向け，自分の殻のなかに閉じこもろうとする。シューマンやブラームスの音楽にこの型のものが多い。いわば二重人格的に夢と現実の間をさまよう状況を私小説的に語

ろうとする音楽である。それは極めて主観的，情動的，不確定的で，壊れ易く，繊細極まりない音楽である。本稿で取り上げるシュテファン・ヘラーの音楽は，この型のロマン派音楽の代表的なもといえる。社会と現実に対して斜に構え，何重にも屈折したやり方で自虐的に自我意識の内奥を垣間見させようとする。ここで重要なことは，この極めて特殊的，主観的な個性（キャラクター）の意識的自覚とその表出である。ロマン派のキャラクターとは古典主義的価値基準としての「高貴な単純さと静かな偉大さ」（ヴィンケルマン）の対極に措定される不安定，新奇，屈折，病的不健全，醜悪，自己陶酔といったマイナスの価値である。マイナスであることこそが，この時代に積極的な意味を待ったのである。それは文学では性格演劇，性格小説といった内的独白に，音楽ではいわゆるキャラクター・ピース（性格的小品）としてこの上なく含蓄に富んだ音の小宇宙を生み出すこととなる。

3

さてここで，簡単に彼の生涯を紹介しておく。ユダヤ系の両親は，息子を天才音楽家として世に出そうと考えた。軍楽隊の隊員から音楽の手ほどきを受け，ペストの有名なピアノの教師，フランツ・ブラウアー（Franz Brauer）についてピアノを学び，さらに有名なオルガニスト，チブルカ（Cibulka）に作曲を学んだ。その後ヴィーンに出てカール・チェルニー（Carl Czerny）に学ぼうとしたが，授業料が高すぎて諦め，多くのピアニストを育てたアントン・ハルム（Anton Halm）の弟子となった。ハルムを通じてヘラーはシューベルト，ベートーヴェンと知り合った。

1828 年ピアニストとしてデビューしたが，その成功に味をしめた父は，ハンガリー，トランシルヴァニア，ポーランド，ドイツと 2 年に及ぶ一大演奏旅行に彼を連れて回った。最後にアウグスブルクに到着したときには，彼は神経的に疲労困憊して病の床に倒れた。治療のため数週間滞在の予定が，8 年間もの滞在になってしまった。その間，彼は最高にインテリで芸術的なアイヒタールのカロリーネ・ヘスリン婦人（Frau Caroline Hoeslin von Eichthal）の家に身をよせ，その息子にピアノを教えた。また教養豊かなフリードリヒ・フッガー＝キルヒハイム＝ホーエネック（Friedrich Fugger-Kirchheim-Hoheneck）の庇護と指導により，アウグスブルクの宮廷楽長，イポリート・シェラール（Hippolyte Chelard）について作曲を学んだ。

ヘラーのアウグスブルク時代の作品は，ゲーテ，ハイネその他のドイツの詩に作曲した多くのリートであるが，その大部分は出版されずに，フッガー家の私蔵書として残されている。

アウグスブルク到着後数年して，彼は自作をシューマンに送り，批評を仰いだ。シューマンは「音楽新時報」（Neue Zeitschrift für Musik）でそれらの作品を熱狂的に賞賛した。間もなくヘラーはシューマンのダヴィッド同盟のお気に入りのメンバーとなり，「音楽新時報」のアウグスブルク連絡員として働くように誘われた。その時シューマンによって命名されたペンネームは微笑むジャンの意のジャンキリー（Jeanquirit）であった。

1838 年にパリに移住。以後死ぬまでパリに住み，生計を得るためピアノの弟子を取り，ガゼット・ミュジカール（Gazette musicale）の音楽批評を担当した。1883 年頃から視力が衰え始める。親友が集まって彼のために信託基金を作った。死の直前彼はフランス政府からレジオン・ドヌールの勲章（Chevalier de la Legiond'honneur）を受けた。

図 1 の肖像は，1854 年頃に J.－J.－B. Laurens によって描かれたスケッチである。1853 作曲の作品 82 とほぼ同時代の肖像画である。

彼の作品の大部分はピアノのために書かれている。160 曲以上に及ぶ出版されたピアノ作品の最初のものは 1929 年の＜パガニーニの主題による変奏＞作品 1 である。初期の作品のうちの 2 曲，以前ベートーヴェンのパトロンであったヘラーの友達のブルンスウィック伯爵夫人に献呈された＜序奏，変奏と終曲＞作品 6（1830）と＜ソナタ，ニ短調＞作品 9（1829）についての批評で，シューマンがヘラーの音楽家としての将来性を予言した。

彼は殆ど専らピアノのためにのみ作曲した 19 世紀の音楽家の一人である。その場合名人芸的作風に傾いた多く

Stephen Heller
Zeichnung von J.-J.-B. Laurens, 1854?
Drawing by J.-J.-B. Laurens, 1854?
Musée Duplessis, Carpentras

図1　シュテファン・ヘラーの肖像

のこの種の作曲家とは異なり，彼は意識的に名人芸的なものを拒否した。特にフランスの社交界に流行した名人芸的なものや，サロン風の音楽を嫌って独自のピアノ音楽の世界を切り拓いた。演奏技術的には中程度の難しさで，曲によってはとても弾き易い。歯切れのよい，いきいきとしたリズムと全ての音がうまく指の下にはまる有り難い書き方は，その魅力的なピアノの響きと共に演奏者に弾きたい気持ちを起こさせる音楽である。やや手の込んだ旋律と和声の技法を伴う気分画的作品とビーダーマイヤー調の作品が併存している。彼は1839年以来パリに暮らしたが，シューマンの心配にもかかわらず，当時のフランスのサロン風の音楽からは殆ど影響を受けなかった。彼が手本としたものは，特にベートーヴェンとバッハであり，また同時代では，ショパン，メンデルスゾーン，そしてなかんずくシューマンであった。性格的小品は，彼の最も重要なジャンルであるが，それはエチュード，プレリュード，序曲といった他のジャンルに統合されることも多い。

彼の作品はおよそ初期，中期，後期に分けられるが，彼がパリで作曲家として認められたのは，＜練習曲集＞作品16（1840）や，コンサート・エチュード＜狩＞作品29（1844）が，リストを始めとするピアノの巨匠によって全ヨーロッパで演奏されるようになった時以来である。初期の編曲ものは，リストのそれと並んでフランス人にシューベルトのリートの美しさを知らせるのに役立った。こうした初期の作品の多くに見られる活力に富むリズムと叙情性は，ヘラーの一大崇拝者であったビゼーとマスネーの音楽に影響を与えた。

中期の性格的小品には文学からヒントを得たものが多い。魅惑的な性格的小品，＜ある孤独者の散歩＞作品78（1851），＜森にて＞作品86（第1集，1854），＜花と果実と茨の画＞作品82（1853）は中期の代表的な作品であるが，その微妙で牧歌的，反省的，内省的性格は19世紀後半のフランス音楽を暗示している。この種の作品は「風景音楽」ないしは「自然音楽」と呼んでよいような簡潔な詩的叙情性をたたえている。

後期の作品では，表現手段がいっそう切り詰められ，繊細な心理のためらいを映しだすと同時に，詩的叙情性から渋い歌の世界へと進む。またそこでは新しい音響表象が開拓される。和声機能が曖昧にされ，オスティナート・バスや保持低音の使用が単調な音響印象を生みだし，印象主義音楽への道をすら予感させる。

1853年3月15日付けのブライトコップ・ウント・ヘルテル社宛の手紙で，彼は作品81の＜プレリュード＞について次のように述べている。「全く短いが，それ自体で完成された，自足的な音楽を書きたかった。多くの言葉を用いて何かを語ることはやさしいことであるが，むしろほんの2〜3刷毛で何か崇高なもの，気の効いたことを暗示しようとした。プレリュードは未来の詩のための隅の親石となるであろう」（2）といっている。

4

さて本稿で取りあげる＜花と果実と茨の画＞作品82（1853年）の題名は，ドイツ・ロマン派の小説家，ジ

Blumen-
Frucht- und Dornenstükke
oder
Ehestand, Tod und Hochzeit
des
Armenadvokaten F. St. Siebenkäs
im Reichsmarktflecken Kuhschnappel
von
Jean Paul.

Erstes Bändchen.

Berlin, 1796.
In Carl Matzdorff's Buchhandlung.

Titelblätter des 1.Bandes der 1.Auflage

図 2　ジャン・パウルの小説の初版の扉

ャン・パウル（Jean Paul Friedrich Richter, 1763-1825）
の＜花と果実と茨の画。別名田舎町クーシュナッペルの貧乏弁護士ジーベンケースの夫婦生活と死と結婚＞（1796-1797）（Blumen= Frucht= und Dornenstücke oder Ehestand, Tod und Hochzeit des Armenadvokaten F. St. Siebenkäs im Reichsmarktflecken Kuhschnappel）という長い小説の題から取ったものである。図 2 はジャン・パウルの小説の初版の扉である。（3）小説の筋は，貧乏弁護士ジーベンケースが余りにも所帯じみた妻レネッテとの夫婦生活に耐えられなくなり，友人の計らいで自分は死んだことにして，レネッテが再婚するのを待って，相思相愛のナタリーと結婚するというものである。理想と現実の相克を独白的に描いたロマン主義的長編小説である。

この小説では主人公が現実と夢，エロスとアガペーの間を絶えず行き交う。作者自身とも考えられるジーベンケースは，仮装とロマネスク（小説的奇異）を好み，実在から仮象へと上昇しようとする自我と，自他の仮装を剥し，正体を暴露しながら，仮象から実在へ，恐らく到達不可能な実在へと下降してゆこうとする自我との二重性のなかで苦悩している。現実家の妻がロマネスク志向の夫に寄り添い，彼女が夫の精神を長く，無慈悲に誤解すればするほど，夫は安んじてロマネスクの世界に逃げ込むことができる。両者はともにこの長編小説のロマネスクの共犯者であり，二人の結婚生活が長々と，しばしばマゾヒスティックな悦楽さえ伴って叙述されるのはこのためである。西欧近代社会のなかで二重，三重に屈折する自我を，夢と現実の間で往復させる世界こそは，ロマン主義的心性の極みといえるであろう。しかしそれを理解することは，容易ではない。なぜならば読者の方にも，このロマネスクな世界に遊べる資質がなければならないからである。少なくともこのジャン・パウルのロマネスクな世界に感情移入できなければならい。

5

ところで，シュテファン・ヘラーの＜花と果実と茨の画＞作品 82 は，ジャン・パウルの同名の小説の筋を描写した標題音楽ではない。そこにはジーベンケースも妻のレネッテも恋人のナタリーも登場しない。ヘラーの音楽とジャン・パウルの小説との間には直接的，具体的関連はなにもない。それでは何故このような題がつけられたのか。ヘラーの作品 82 は，18 の性格的小品からなる一種の連編曲集である。各曲にも暗示的な題がつけられている。こうしたことはいったい何を意味するのか。また，この音楽を演奏しようとするとき，それはどのように役立てられるのであろうか。

ほとんど単一の材料からできた短い各曲が，意味ありげな題によって極めて意味深長なものに見えてくる。曲の題が曲のキャラクターと連動して，それを暗示するのである。フランスではジャン・パウルのドイツ語の原題では通用しないので，＜眠られぬ夜＞（Nuits Blanches）と題して出版された。各曲の題もフランス語表示のものが多い。個性的で魅力的な冒頭の数小節の音楽が（主題）

その曲のキャラクターを規定する。主題の反復に含まれ

る僅かな変化がキャラクターの魅力を倍加して，聴者の微笑みを誘う。

ショパンの＜24 の前奏曲＞やシューマンの＜子供の情景＞のように曲ごとに調，拍子，発想記号を変える。第 10 曲まではハ長調－イ短調－ト長調－ホ短調－ニ長調－ロ短調－イ長調一嬰ヘ短調－ホ長調－嬰ハ短調と 5 度圏と平行調の組み合わせで整然と進むが，第 11 曲目からは

長・短調の交替は維持されるが，調配列は変ト長調－変ロ短調－変ニ長調－ヘ短調－ヘ長調－ニ短調－変ロ長調－ト短調と規則性を欠く。

ヘンリー・E. クレビールによれば，これらの曲はさまざまな気分，夢見心地，幻想，空気，微笑，大胆，無気力，鈍重，屈折といった気分の表明であり，それはジャン・パウル・フリードリヒ・リヒターの豊穣な空想が創り出す小説の登場人物が持つ気分に酷似している。(4) また R. E. ブース・ジュニアーは，これら 18 曲全てにドイツ・ロマン主義音楽の影響が色濃く見られるが，同時にここにはヘラーの音楽的個性に深く係わる二つの特色が存在するという。その一つは明確なハンガリー的リズム感で，それは第 9 曲や第 14 曲に見られる。そこではリズムのパターンが不規則で，即興的に感じられる。いま一つの特色は彼の作品のピアノという楽器に対する完全で，自然な適応性である。このことは，ヘラーが一生を通じて即興演奏の名手であり，常にピアノに向かって作曲していたこととも関連している。彼の全作品に見られる表現の自発性と新鮮さもそこに根ざすものと思われる。(5)

次に表 1 に掲げた譜例（1～18）を参考にしながら曲の簡単な分析を行うこととする。

第 1 曲，＜水の精＞(La Naïade)，ハ長調，4/4 拍子。この音楽は 4 オクターヴ半の広い音域のなかを低いハ音から高いト音に向けうねりながら上昇する分散和音の波形の動きと，その波の頂きに一瞬顔を見せるトーホの下降短 3 度の旋律断片とからできている（譜例 1a)。曲全体も 42 小節の短いものであるが，その単純な楽想が時の流れとともに，和音を変え，途中平行調のイ短調に転調して，一瞬水面が持ち上がるとき（譜例 1b)，名状し難い甘味な気分に誘い込まれる。曲はすぐハ長調に戻り，最後は波の頂きの旋律断片をゆっくりと下降させて下属和音→主和音の緩い和声終止形に乗って静かに水底に消えて行く（譜例 1c)。最後から 2 小節目の第 3 拍で，右手の下属和音のハ音に代わって現れる非和声音のロ音が一瞬ためらうところに波間に漂う水の精の面目躍如たるものがある。それはあたかも波間に一瞬姿を現す水の精を描写する音楽であるかのように思える。しかしそれにしては余りにも単純な音楽である。それにこの音楽を譜面通り 4/4 拍子で機械的に演奏するとまるで様にならない。また同一和音が続く第 1～3 小節の間，延音ペダルを踏み続けるよう指示されている。平均率調律のピアノでは響きが増幅され，調律曲線の結果生じる不快な唸りが重なって混濁した音となり，波間に顔を見せる美しい女神の透明な微笑を現出させることにはならない。

しかし，＜水の精＞は＜花と果実と茨の画＞の内容と直接の関係はない。とするとこの音楽への入り口はどこにあるのであろうか。最善の状態に調整されたピアノを使って，楽譜のどんな小さな指示も見逃さないようにして，何度も何度もこの曲を弾いているうちに，演奏者である自己の意識の流れのなかに，作曲者の心の動きが浸透してくる。その時に見えてくるものは，必ずしも水の精の姿ではない。そこにあるものは，ヘラーの意識のなかで幻想されたこの上もなく美しい水の精に対する無限の憧れ，より正確にはその憧れによって異様に高まるヘラーの意識の時間の大きなうねりである。その心の高まりこそは，ヘラーがジャン・パウルの小説＜花と果実と茨の画＞に共感し，そこに感情移入した結果生れたロマンティックな精神そのものである。ジャン・パウルの小説に描かれているあの二重人格的に屈折したロマネスクの世界をオーバーラップさせることによって，これを演奏する者にも，聴く者にもこの音楽への感情移入が行いやすくなる。ジャン・パウル＝ヘラー＝演奏者（鑑賞者）のこのような図式のなかで，極度に繊細な神経を駆使しながらこの曲を演奏すると，そこには恐らくジャン・パウルが見たであろう，そしてヘラーが聴いたであろう女神が，幻の彼方に明確なキャラクターとなって浮かび上がってくるはずである。ただ，このような奇跡が起こる

ためには，ピアノの響きにも，演奏者の心にも，そしてまたそれを聴く人の心にも，ある種のロマネスクなものが要求されるのである。ロマン派音楽の第 5 の型の難しさは，まさにこの感情移入にあるといえる。楽譜が暗示するものと演奏者がそこに投影する感情やイメージとの間の度重なる往復運動的対話のなかから初めて，この曲のキャラクター，つまりヘラーの音楽の本質が甦ってくるのである。

第 2 曲，＜激情に駆られた女＞（Furiosa），イ短調，6/8 拍子。高音域から 16 分音符で雪崩れ落ちてくる音形と，第 1 拍にアクセントを置いた左手のスタカートの和音連打が現実の女性の狂おしい情念を想像させる（譜例 2a）。曲の後半では，8 分音符の山形音形に続く 16 分音符の旋回音形が広い音空間を上昇して，その頂点から一気に低いハ音まで下降して，冒頭の激しい和音連打に戻る。その後，やや間を置いてヘーイーハの分散和音をゆっくりとした足どりで高いハ音まで登りつめる（譜例 2b）。激情に駆られた女が一瞬見せる詠嘆の身振りである。

第 3 曲，＜静穏＞（Serena），ト長調，4/4 拍子。激しい第 2 曲との対比によってこの曲の静穏な性格がいやが上にも強調される。冒頭の 4 小節の静穏な歌（譜例 3a）が，限りなく透明な仮象の世界を創造する。小さな山を作ってたゆたう右手の歌と，それに伴走するバスの揺れる動きが，この上もなく平安を気分を呼び起こしてくれる。このたゆたう歌が，最後には深い 3 回の溜息となって，ト長調の主三和音の分散和音の彼方へと霧散する（譜例 3b）。ここでもⅡ→Ⅳ→Ⅰの穏やかな和声終止形が使用されている。

第 4 曲，＜西風＞（Zéphyr），ホ短調，6/8 拍子。西風は，レガートとスタカートを使い分けながら，まるで人の心を煽り立てるように激しく吹く（譜例 4a）。曲の途中，西風はやさしいそよ風となって，ト長調とホ短調の間を行き交いながら青空の彼方へと舞い上がる。フォルテ，ア・テンポでホ短調に戻ったところから，西風は第 4 拍にうたれるバスのホ音の低い唸りに支えられて，大きな風となって最後の和声終止に向かって一気に駆け抜ける（譜例 4b）。硬軟両面の動きをする西風が二重人格的な情緒の不安定さを示しているのである。

第 5 曲，＜欲望＞（Le Désir），ニ長調，3/4 拍子。誇張された身振りの装飾音を伴って 2 オクターヴ飛び上がっては分散和音を下降して，4 分音符の 3 連打の上に停滞する 2 小節の楽想の執拗な反復によって，官能的な欲望の高まりを作り出す（譜例 5a）。後半ではその動きが 1 小節の山形の身振りに凝縮されて，まるで夢遊病のように果てしのない欲望のうねりを繰り返すが，最後には下属和音→主和音の和声終止形と共に力尽きる（譜例 5b）。

第 6 曲，＜謹厳実直＞（Seriosa），ロ短調，3/4 拍子。第 2 拍にアクセントをずらせて右手が奏するスタカートとレガートの対比による主人公の癖のある歩みが，左手バス声部の第 1，第 2 拍及び第 3 拍裏拍を打つややいびつな足どりによって微妙に弾ませられる（譜例 6）。この多少気取った個性的な足どりが，現実の生活に巧く適応できない田舎町の貧乏弁護士，ジーベンケースのキャラクターであるのかもしれない。

第 7 曲，＜告白＞（L'Aveu），イ長調，2/4 拍子。音階を 8 分音符のスタカートとレガートの 3 連音符でおずおずと上昇して，その頂点でうなだれる告白の口ごもりが第 6 曲の弾む足どりと鋭く対比させられる（譜例 7）。第 1 小節の四つの 8 分音符に与えられたスタカート記号と，その 4 音に掛けられたタイ，第 2 小節の和音のアルペジオ奏法と 3 連音符，第 2 小節から第 3 小節前半にかけての大きなタイ，そして第 3 小節第 2 指のタイを掛けられた二つの 8 分音符に付けられたアクセント記号と，第 3 小節全体に及ぶ延音ペダル，こうした木目細やかな奏法上の指示が，僅か 32 小節のこの曲に鮮やかな個性を与えている。

第 8 曲，＜短気＞（Impatience），嬰ヘ短調，3/4 拍子。高い位置から 16 分音符で雪崩れ落ちる 2 小節の音形とそのオクターヴ低い音域でのエコーが，現実世界の苛立たしさを生み出す（譜例 8）。

第 9 曲，＜ことずて＞（Message），ホ長調，2/4 拍子。規則的に動く左手の伴奏和音の間を縫って切々と訴えかける楽想が延々と続く（譜例 9a）。それはまるで失恋の恨みつらみの手紙のようである。ちょっとしたスラーやスタカートの記号，アクセント記号に延音ペダルが失恋の手紙に陰影を添える。中間部及び曲尾でのシンコペー

ション風に打たれる裏拍のイ音，嬰ニ音，ロ音の連打と，2 小節単位での延音ペダルの使用によって，「ことずて」は現実空間を越えて，遠く故郷のハンガリーの空を夢見ているのかもしれない（譜例 9b）。

第 10 曲，＜気まぐれな女＞（La Capricieuse），嬰ハ短調，6/8 拍子。その自信に満ちた傍若無人な行動は，相手の細やかな愛情も，深い憧れも吹き飛ばしてしまう。そこには現実的な女，レネッテの姿がオバーラップされる（譜例 10a）。中間では気まぐれな女の怒りが 16 分音符の山形の音形の反復とその最後での 7 連音符による爆発となって現れる（譜例 10b）。第 9 曲の木目細やかな愛の告白と好対照をなしている。

第 11 曲，＜諦め＞（Résignation），変ト長調，6/8 拍子。主人公は失恋の現実から仮装のロマネスクの世界へと逃避する。古典調律では，フラットの多い変ニ長調や変ト長調はことのほか透明に響く。「諦め」の境地が冒頭の 2 小節の左手に現れるたゆたう楽想と，それに応える右手の決断的な歩みに集約される（譜例 11a）。中間部では要所に充実した和音を配しながら，両手のユニゾンで小さな山を繰り返して諦め切れない想いを切々と訴える（譜例 11b）。後半，主題旋律が静かに左手で歌われ，遥か天上から 16 分音符の流れ星が降ってくるところでは，諦めの現実から仮象の世界に転じて優雅な微笑を浮かべるジーベンケースの，そしてヘラーの姿が感じられる（譜例 11c）。まさにロマン主義芸術の一つの極致がここにある。

第 12 曲，＜メランコリー＞（Mélancolie），変ロ短調，2/4 拍子。心は再び現実に戻って憂愁に耽る。シンコペーションと模続進行で盛り上げていく 8 小節の暗く，激しい扇情的主題は漸増効果を利用して異常な心の高ぶりを見せる（譜例 12a）。それを中断する晴朗なヘ長調及び変ニ長調の楽想が，作者の二重人格的，内面の屈折を垣間見させてくれる（譜例 12b）。またこの晴朗な楽想から冒頭のメランコリー主題に戻ろうとするところでは，付点 4 分音符と 8 分音符の組み合わせが二重付点 4 分音符と 16 分音符の組み合わせへと先鋭化され，そのリズムに誘発されたかのように変ロ短調の音階をストレッタ（テンポの急迫化）で駆け上がり，その頂点から速度を落として下降し，メランコリー主題に帰着する（譜例 12c）。この厳しい「メランコリー」を癒してくれるのが，次の第 13 曲＜慰め＞である。

第 13 曲，＜慰め＞（Consolation），変ニ長調，6/8 拍子。第 1，3 小節に主和音を，第 2，4 小節に属七和音を規則的に配し，その間を縫って右手が変イ音と属和音の分散和音の音でたゆたうこの清楚な音楽にはリストの＜コンソラシオン＞にも，ショパンの＜ベルシューズ＞にも勝る優雅さがある（譜例 13a）。第 5 小節第 5 拍の左手の和音では変イ音がイ音に変化させられて，無類の効果を発揮している。中間部には主楽想から派生した 4 小節の新しい揺りかご旋律が現れるが，それは左手の二重ドローン（保持低音）に乗って，心地よく揺れる。同じ揺りかご旋律が変ニ長調と変ニ短調の間で反復されて冒頭の「慰め」の音楽に戻る（譜例 13b）。ペタリング，右手と左手の音量のバランス，6/8 拍子とシンコペーションの柔軟さに細心の注意をはらって演奏するとき，ロマン派音楽における典型的なキャラクターの一つであるコンソラシオンの神髄に触れることができるであろう。

第 14 曲，＜苦悩＞（La Douleur），ヘ短調，3/4 拍子。ここではハンガリー風の行進曲のリズムに乗って心の痛みが再び戻ってくる。左手の奏する山形の主旋律は第 2 拍にアクセントを置く癖のある動きで，強弱の使い分けと共に苦悩の漸増効果を高めている（譜例 14a）。トリオ風の中間部と曲尾に現れる旋律は，ハンガリアン・ラプソディーを感じさせる（譜例 14b）。

第 15 曲，＜波の戯れ＞（Jeu des ondes），ヘ長調，6/8 拍子。第 14 曲の苦悩はこの静穏な波のなかに昇華されて，夢幻の世界へと飛翔する。32 分音符の細波の上下を 4 分音符と 8 分音符でゆっくりと動く歌は，ドビュッシーやラヴェルの音楽を先取りしているかのようである（譜例 15a）。最後にはこの楽想は 32 分音符の分散和音に対して反進行するトリル付きのオクターヴ跳躍音形と組み合わさった水の飛沫となって飛散する（譜例 15b）。

第 16 曲，＜決心＞（Résolution），ニ短調，3/4 拍子。ここでは鋭い上拍リズムと激しく上方を志向する 16 分音符の分散和音とが，現実世界からの離脱願望を示しているかのように見える（譜例 16）。この決断を促す楽想が，曲全体を通じて執拗に繰り返される。

第 17 曲,〈優雅〉(Euphrosine), 変ロ長調, 2/4 拍子。主人公はここでギリシャの三美神の一人である優雅の女神に出会う。その軽やかで，気の利いた身振りは，シューマンの音楽の気品を湛えている。ここでもペダルの独特の使用法によって響きが滲ませられる。冒頭の 8 小節の楽想は裏拍にアクセントをずらし, 半音階的和声を効果的に使用して，独特の浮遊感を生み出している（譜例 17a)。まさにギリシャの三美神がヘラーの夢枕に立ったのである。曲の最後では優雅の女神が陽炎のように揺れながら，仮象の牧歌的世界へと飛翔する（譜例 17b)。これもまたヘラーならではの優雅な一幅の風景画である。

第 18 曲,〈別れ〉(L'Adieu)，ト短調，2/4 拍子。タランテラ風のリズムがわれわれを再び現実の世界に連れ戻す。同度の鋭いファンファーレ・リズムと，3 連音符による柔軟な谷型の音形との交替からなるこの音楽は, 現実的なものと夢幻的なものとの往復のなかでさまようロマンティックな精神の不確定性の象徴とも考えられる（譜例 18a)。曲の最後では同度のファンファーレ・リズムがユニゾンから始まって短 2 度, 長 2 度の鋭い緊張を生みながら，ト短調の和声終止に向けて盛り上げていく。その頂点から, 夢幻の彼方に逃避しようとする主人公は, ピアニッシモで 3 連音符の走句を一気に駆け抜けて, 忘却の国へと去っていく。最後の属和音と主和音の弱奏が虚しい（譜例 18b)。いかにもヘラーらしい「別れ」である。

以上の分析からも明らかなように，この 18 曲にはある種の特徴がうかがえる。即ち奇数番号の曲（長調）では，上方を志向する楽想ないしは音の身振りが多いのに反して，偶数番号の曲（短調）では高いところから一気に雪崩落ちる動きや躍動感に溢れるリズムが目立つ。このことは単なる偶然ではないようで, 奇数番号の曲の題と偶数番号のそれとは対照的に異なっている。ヘラーはジャン・パウルの同名の小説に共感し，特にその夢と現実の間をさまよう二重人格的自我を感情移入的に自作のなかに取り込もうとしたのではなかろうか。そのような角度から眺めて見ると，奇数番号の曲にはアガペーの世界，ロマネスクな仮装の世界, あるいは現実を越えて遊ぶ夢想の世界を暗示する題,〈水の精〉,〈静穏〉,〈告白〉,〈諦め〉,〈慰め〉,〈優雅の女神〉　といったものが見られる。他方偶数番号の曲にはエロスの世界, 現実世界につながるイメージの題,〈激情に駆られた女〉,〈西風〉,〈短気〉,〈気まぐれな女〉,〈苦悩〉,〈決心〉，そして〈別れ〉といったものが見られる。もちろそれぞれの曲に夢と現実，アガペーとエロスが微妙に交錯しながら潜在していることはいうまでもない。換言すれば，これはヘラーの〈花と果実と茨の画〉に感情移入した筆者の主観的な解釈に過ぎないのかもしれない。しかしながらそのような主観的な解釈なしには蘇ってこないところにこそ, ヘラーの音楽のロマン主義的特質があるのである。

主観的とはいえ，こうした分析に際しては，シュテファン・ヘラー及び同時代のロマン派のピアノ音楽の多くのものとの様式上の比較研究が必要となるので, 当然のことながらこの研究は，さらに広範な 19 世紀ヨーロッパ音楽研究へと展開していくものである。本研究はそうした 19 世紀音楽文化研究の出発点の一つとして企画されたものである。

本研究は, 平成 5 年度　塚本学院教育研究補助費による研究,〈Theodor　Kirchner（1823-1905）と Stephen Heller（1813-1888）のピアノ音楽の研究－19 世紀ヨーロッパの失われた音へのアプローチ―〉の一部をなすものである。

（注）

（1）古典調律の一つであるヴェルクマイスターⅢに調律した。それはいわゆる平均率調律ではないので，調によって 3 度や 5 度の音程が微妙に変化する。例えばハ長調と変ニ長調では調の感じがかなり異なる。さらに古典調律ではいわゆる調律曲線をかけないで，フラットに調律するので，特に延音ペダルを使用したとき，高い純正倍音が共鳴して膨らみと伸びのある美しいピアノの響きが得られる。普通，ピアノの調律では調律曲線をかけて，つまり高音域を高めに，低音域を低めに調律する。その結果高い音が際立つと考えられているが, 純正倍音が失われて, 音が濁り, 不快な唸りを生じる。

（2）Ronald Earl Booth Jr., The Life and Music of Stephen Heller, 1969, The University of Iowa, p 98

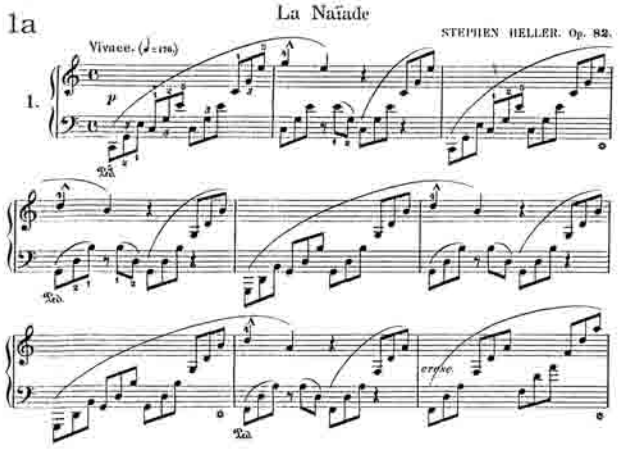
（3）Weimar の Hermann Bohlaus Nachfolger から出た 1928 年版を，大阪大学文学部ドイツ文学研究室から借りて，見ることができた。鈴木武樹の日本語訳があるが，入手は難しい。

（4）Henry E. Krehbiel, The Pianoforte and its Music, New York：Charles Scribner's Sons, 1911, p 224

(5) Ronald Earl Booth Jr., op. cit. p. 117

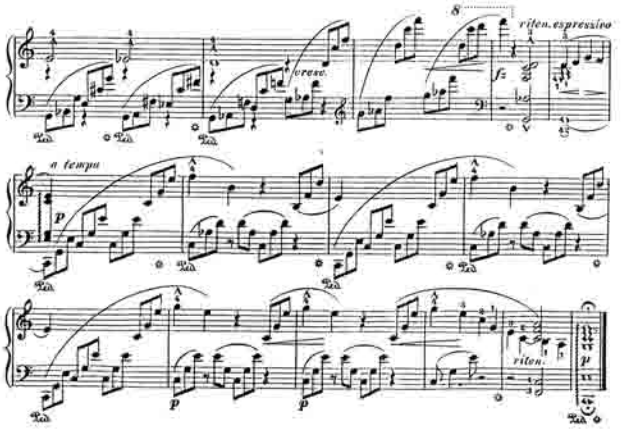
表1　譜例

1a

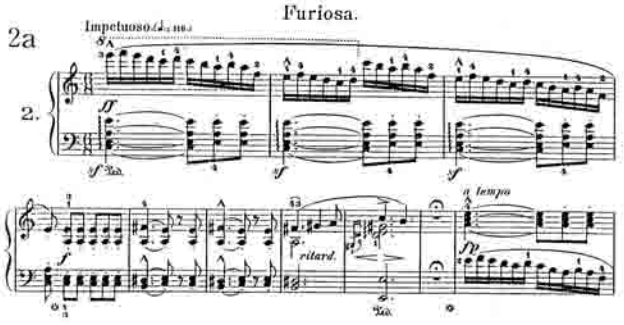


1b

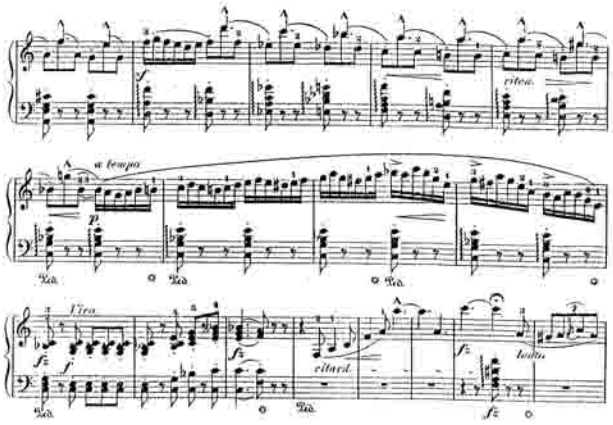
1c



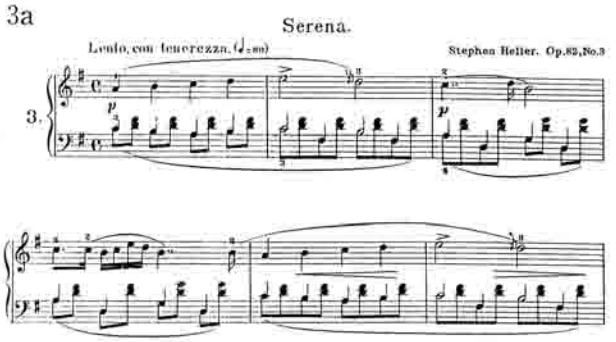
2a



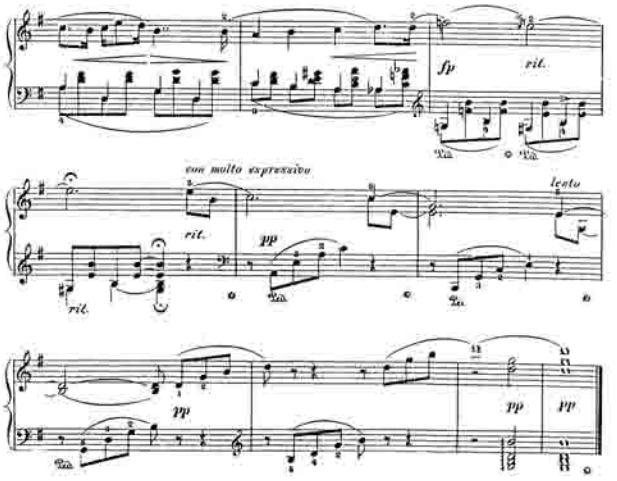
2b



3a



3b



4a

Zéphyr.

Stephen Heller. Op. 82, No. 4

Molto animato. (♩=200.)

4.

4b

a tempo

ritard.

accel.

cresc.

5a

Le Désir.

Quasi Allegretto. (♩=108.)

5.

5b

cresc.

ritard.

riten.

6

Seriosa.

Allegro deciso. (♩=132)

6.

7

L'Aveu.

Più lento. (♩=84)

7.

cresc.

Impatience.

8

Allegro appassionato. (♩=160)

8.

9a

Message.

Allegretto con grazia. (♩.=108)

Stephen Heller. Op. 82, No. 9

9.

p

riten.

a tempo

cresc.

f

sf

9b

f

mf

p

f

fz

p

10a

La Capricieuse.

Allegro con impeto. (♩.=112)

10.

fz

f

più f

rit.

fz

p

10b

f

fz

f

11a

Résignation.

Andante con moto. (♩.=63)

Stephen Heller. Op. 82, No. 11

11.

p doleiss.

p

11b

f

p

doleiss.

cresc.

f

11c

pp

p

f

fz

rit.

lento

pp

12a

Mélancolie.

Allegro molto agitato. (♩= 152)

12.

12b

tranquillo dolce

12c

stretto

rubato

rit

dimin.

13a

Consolation.

Allegretto con grazia. (♩= 76)

13.

13b

delicatamente

14a

La Douleur.

Più moderato e plintivo. (♩= 88)

14.

14b

15a

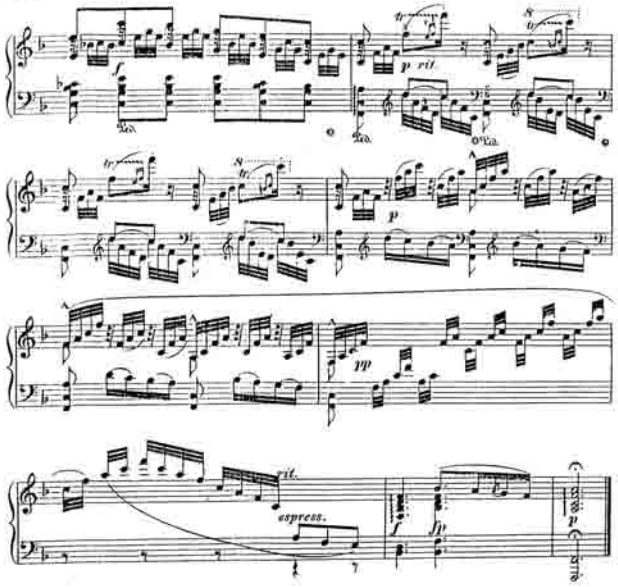
Jeu des ondes.

Andante placido. (♩= 104)

15.

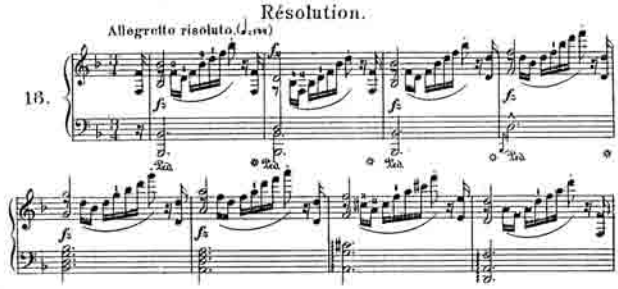
riten.

15b



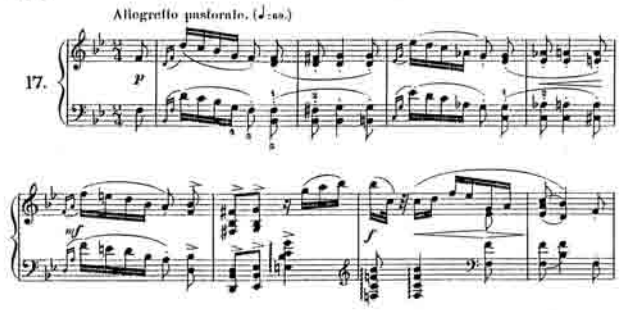
16

Résolution.

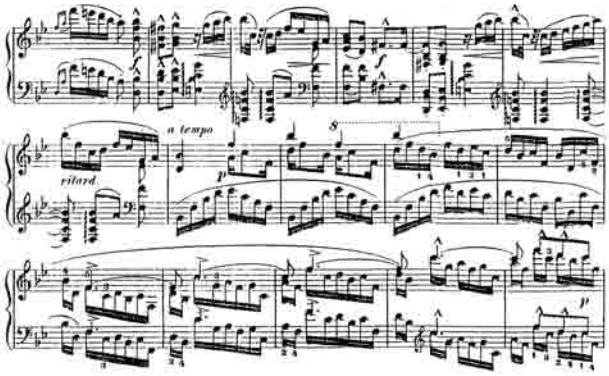


17a

Euphrosine.

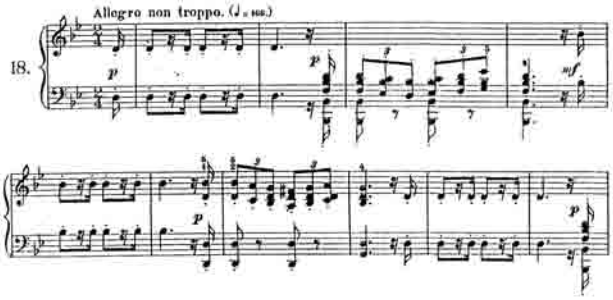


17b

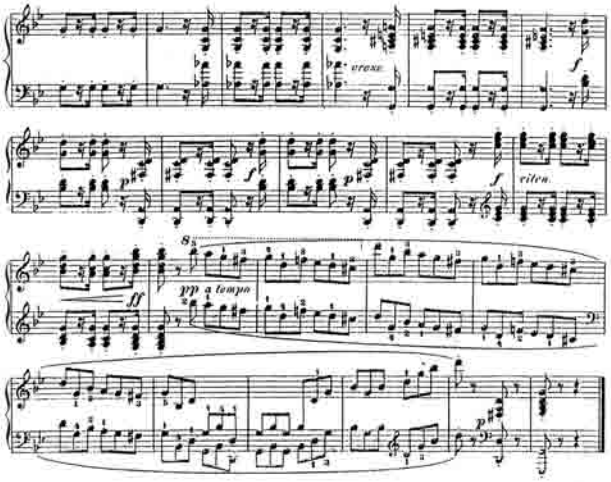


18a

L'Adieu.



18b



参考文献

Ronald Earl Booth, Jr.：The Life and Music of Stephen Heller, 1969, The University of Iowa, Ph. D. 1969 Music, U・M・I Dissertation Services

William S. Newmann：The Sonata since Beethoven, Chapel Hill, The University of North Carolina Press, 1969

Gerhard Puchelt：Verlorene Klänge, Studien zur Deutschen Klaviermusik 1830-1880, Robert Lienau, Berlin-Lichterfelde 1969

W. Ohelmann (Hrsg)：Reclams Klaviermusikführer Bd. II. Stuttgart 1967

A. Einstein：Die Romantik in der Musik. München 1950

表2　シュテファン・ヘラー　作品一覧

作曲年	作品番号	曲　名	備　考
1829	1	Thème de Paganini, var. (Kistner).	
	2	Les charmes de Hambourg, Rondeau brill. (Cranz Bohme).	
	3	Fantasie dramatique sur des thèmes des opéras: Semiramide—La Muette (Hambourg, Bohme).	
	4	Variations brilliantes (Valse fav. de Hubowsky). (Pest, Treichlinger).	
	5	Variations brilliantes sur un thème polonais (Pest, Treichlinger).	
	6	Intr., Variations et Finale (Zampa). (Peters).	
	7	3 Impromptus (Kistner). Leipzig.	
	8	Rondo Scherzo (Kistner).	
	9	1. Sonate D-moll (Kistner).	
1839/7	10	Trois Morceaux brilliantes sur l' Elisire et Norma (Schott). Mainz.	
1840/7	11	Rondo valse (Schott). (Frau Baronin von Hoeslin-Eichthal).	
	12	Rondolette sur la Cracovienne du Ballet "La Gipsy" (Br. & H.). Leipzig.	Robert Cocks & Co., London 18768, BLDSC
	13	Divertissement brill. sur une Romance de l'opéra "Les Treizes" de Halévy (Br. & H.).	
1839	14	Passe-temps. 6 Kaprizen über Tänze von Joh. Strauss (Furstner). Berlin.	
	15	Rondino brilliante sur "La pauvre couturière" (Les Treizes de Halévy). (Br. & H.).	
1840	16	L'art de phraser. Morceaux de Salon. Études mélodiques. 5 Hefte (Schlesinger). Paris.	G. Schirmer 12804/5 大音大
1840/5	17	6 Caprices sur "Le Sherif" (Schott). Moscheles gewidmet.	
1842/1	18	Improvisation sur la Chanson du pays de Reber (Schott).	
1846/10	19	2 Caprices sur la Captive de Reber. (Schott).	
1844/7	20	2 Impromptus sur "Hai luli" de Reber. (A son ami Eugène de Froberville). (Schlesinger).	
1844	21	2 Impromptus "Bergeronette" de Reber (Schott). (A Auguste Morel).	
	22	4 Rondos brillantes sur "La Favorite" de Donizetti (Schlesinger).	
	23	4 Rondos brillantes sur "Le Guitarero" de Halévy (Schlesinger).	
	24	Scherzo (Spina). (Wien).	
	25	1. Paraphrase sur "Richard Coeur de Lion". (Spina).	
	26	2. Paraphrase sur "Richard Coeur de Lion". (Spina).	
	27	Caprice brillant (Hofm.).	
	28	Caprice brillant (Spina).	Schlesinger, Paris 3790 BLDSC
	29	La Chasse, Étude de Concert (Schlesinger).	Henle,
	30	Pensées fugitives (10 Stücke f. Kl. arrang. v. Heller (Kistner). (Orignal. Vn. & Pf.).	
	31	Fantasie sur "La Juive" de Halévy (Schlesinger).	

作曲年	作品番号	曲　名	備　考
	32	Bolero sur "La Juive" de Halévy (Schlesinger).	
	33	Lieder von Franz Schubert Die Forelle	1) Schlesinger Berlin 2863 2) Schott 08004 1/2 3) 版不明 BLDSC
	34	" " " Der Erlkönig	F. F. 108 BLDSC
	35	" " " Die Post	Wessel & Co., London, 6136 BLDSC
	36	" " " Lob der Tränen (Schlesinger).(Wessel & Stapleton, London 1845)	
	37	Fantasie sur une romance de "Charles VI" de Halévy (Br. & H.).	
	38	Caprice brill. sur une romance de "Charles VI" de Halévy (Br. & H.).	
	39	La Kermesse, Danse Neerlandaise (Schlesinger).	
	40	Miscellanées: Rêverie, Eglogue, La petite mendiante (Schlesinger).	
	41	Caprice sur un motif du "Deserteur" de Monsigny (Hannover, Bachmann).	
	42	Valse brillante (Schlesinger).	
	43	Valse sentimentale (Schlesinger).	
	44	Valse villageoise (Schlesinger).	
	45	25 Études mélodiques (3 Hefte). (Schlesinger).	Universal 5920
	46	30 Études progressives (3 Hefte). (Schlesinger)	全音 ZPL-141
	47	25 Études pour former au sentiment du rhythme et à l'expression (2 Hefte). (Schlesinger).	全音 ZPL-142
	48	Nr. 1. Paraphrase sur l'opéra "Charles VI" (Schlesinger). Nr. 2. Silvana, Pastorale sur l' opéra "Charles VI" (Schlesinger).	
	49	4 Arabesques. (Schlesinger).	Wessel & Co., London, 5618 BLDSC
	50	Scenes pastorales (Hofm.).	

作曲年	作品番号	曲　名	備　考
	51	Scenes brill. sur la "Marches de la Caarvane" et la "Rêverie du Desert" de Félicien David (Schlesinger).	
	52	Vénétienne (Schlesinger).	Schlesinger, Berlin, 3229 BLDSC
	53	1. Tarantelle (Schlesinger).	
	54	Grande Fantasie (Schlesinger).	
	55	Lieder von Fr. Schubert: Wohin, Liebesbotschaft, Nebensonne, Müller und Bach, Liebe Farbe (Schlesinger).	
	56	Sérénade (Schlesinger).	
	57	Scherzo fantastique (Schlesinger).	
	58	Rêveries du promeneur solitaire (Schlesinger). (1845)	Wessel & Co., London, 6165 BLDSC
	59	Valse brilliante (Schlesinger).	
	60	Canzonetta (Schlesinger). (1846)	Wessel & Co., London, 6191 BLDSC
	61	2. Tarantella (Schlesinger).	
	62	2 Valses brillantes (Schlesinger).	
	63	Capriccio (Whistling). Leipzig.	Wessel & Co., London, 6195 BLDSC
	64	Humoreske (Whistling).	
	65	2. Sonate H-moll (Hofm.) Leipzig.	Wessel & Co., No. 6200 BLDSC
	66	Caprice brill. sur "Le Val d'Andorre" (Bote & Bock), Berlin.	
	67	Improvisata "Auf Flügeln des Gesanges" von Mendelssohn (Bote & Bock.) Berlin.	Wessel & Co., London BLDSC
	68	Stänchen von Schubert (Bote & Bock).	
	69	Phantasie in Form einer Sonate. Es ist bestimmt in Gottes Rat von Mendelssohn. (1847)	Wessel & Co., London, 6219 BLDSC
	70	Caprice Brill. sur "La Prophete" (Br. & H.).	

作曲年	作品番号	曲　名	備　考
1849	71	Aux Mânes de Frédéric Chopin: Élégie et Marche funèbre (Br. & H.).	Wessel & Co., London, 6220 BLDSC
	72	Kapricen, Impromptus und Improvisationen über Lieder von Mendelssohn (Volkslied, Minnelied, Sonntagslied). (Simrock). Bonn.	
	73	3 Stücke (Jägerlied, Soldatenlied, Wiegenlied) (Simrock).	
	74	Fantasie et valse sur "L'enfant prodigue" d'Auber (Schlesinger).	
	75	Rondeau et variations sur "La Dame de Pique" (Br. & H.).	
	76	Capriccio über "Die Heimkehr aus der Fremde" v. Mendelssohn (Br. & H.).	
1851	77	Saltarello über ein Motiv aus A-dur-Symphonie v. Mendelssohn. (Br. & H.).	
	78	Spaziergänge eines Einsamen. 6 Charakterstücke (2 Hefte) (Kistner)	H. Litolff, Brawnschweig, 2614 国立音大
	79	Traumbilder (Dream Pictures) (6 Stücke) (Bote & Bock).	Ashdown & Parry, Hanover, No. 1235-40, BLDSC
1852	80	Wanderstunden: 6 Charakterstücke. (2 Hefte) (Andre, Offenbach)	F. F. 150, BLDSC
1853	81	24 Präludien. (3 Hefte) (Br. & H.).	Kalmus Piano Library, 3515
	82	Blumen-, Frucht-und Dornenstücke. (3 Hefte) (Schlesinger)	Edwin F. Kalmus N. Y. 国立音大
	83	Feuillets d'Album. (6 Stücke) (Schlesinger)	Chappell, London, 9173, BLDSC
	84	Impromptu (Schlesinger). (1854)	Chappell, London, 9174 BLDSC
	85	Tarantellen Nr. 3 A-moll und Nr. 4 As-dur (Br. & H.).	Augener, London, 114221, BLDSC
	86	Im Walde: 7 Charakterstücke (4 Hefte) (Br. & H.).	S. H. 1., BLDSC
	87	Tarantelle Nr. 5 A-moll (Senff.) Leipzig.	
	88	3. Sonate in C-dur (Br. & H.).	Ewer & Co., London, BLDSC
	89	Spaziergänge eines Einsamen (2. Folge; 3 Hefte) (Kistner). (1856) (3. Suite de Promenades d'un solitaire)	Edw. Ashdown, London, BLDSC
	90	24 nouvelles Études. (3 Hefte) (Schlesinger).	
	91	Trois Nocturnes (Senff) (1858)	J. Maho, Paris, 285/6, BLDSC (Wessel & Co. London, 9168)
	92	3 Eklogen (Bote & Bock). (1858)	Schott & Co., 370(1-3), BLDSC
1859	93	2 Valses (Rieter-Biedermann). Winterthur.	
1860	94	Genrebild (A tale) (Kistner)	Cramer, Beale & Chappell, 7395, BLDSC
	95	Allegro pastorale (Simrock).	Cramer, Beale & Chappell, 7442, BLDSC
	96	Grande Étude de concert (Kistner)	
	97	12 Ländler und Walzer (Kistner).	
1861	98	Improvisata über "Flutenreicher Erbo" von Schumann (Rieter-Biedermann). Winterthur.	
	99	4 Phantasiestücke (Schott).	No.1 E. Peters, 7188b, 国立音大 版不明16610 BLDSC
	100	2. Canzonetta (Kistner).	Cramer, Beale & Wood, 7813, BLDSC
	101	Rêveries du promeneur solitaire (J. J. Rousseau). (Simrock).	
	102	Jagdstück (Senff).	

作曲年	作品番号	曲　名	備　考
	103	Nocturno (Schlesinger).	Cramer, Beale & Wood, London, 8103, BLDSC
	104	Polonaise (Br. & H.).	
1862	105	3 Lieder ohne Worte(Rieter-Biedermann).	
1863/4	106	3 Schäferstücklein (Schott).	
1863/5	107	4 Ländler (Schott).	
1863/8	108	Scherzo (Schott).	
1864/1	109	Herbstblätter (Schott).	
	110	Ein grosses Albumblatt und ein kleines (Kistner).	Cramer, Wood & Co., 8522, BLDSC
1865/2	111	Morceaux de Ballet (Schott).	
1865/3	112	Caprice humoristique (Schott).	Schott, Mainz, 18164, BLDSC
1865/10	113	Fantasie-Caprice (Schott).	
1866/1	114	Deux Cahiers (I. Prélude, Scène d' Enfant; II, Presto scherzoso). (Schott).	Schott, Mainz, 18520-1,2 BLDSC
1866/2	115	Trois Ballades (Schott). (D. F. E. Auber gewidmet)	Schott, Mainz, 18596, BLDSC
1866/10	116	2 Études (Schott).	
1867/1	117	3 Präludien (Schott).	
1867/3	118	Variétés (Schott).	
	119	Präludien für Lili (Br. & H.)	E. F. Kalmus 国立音大
	120	7 Lieder für Pianoforte (Br. & H.).	
	121	3 Morceaux (Ballade, Conte, Rêverie du Gondolier). (Br. & H.)	J. Maho, Paris, 754 (1-3), BLDSC
	122	Valse-Rêveries (Br. & H.).	
1868	123	Feuilles volantes (Br. & H.).	
	124	Kinderszenen (Br. & H.)	
	125	24 Études d'Expression et de Rhythme. (2 Hefte) (Br. & H.)	Universal Ed. 1695
1870	126	3 Ouvertüren (für ein Drama, Lustspiel und komische Oper). (Br. & H.).	

作曲年	作品番号	曲　名	備　考
1871	127	Freischütz-Studien (Br. & H.).	
	128	Im Walde. (2. Folge; 7 Stücke) (Br. & H.)	S. H. 2. Augener & Co. Lond. BLDSC
1871	129	2 Impromptus (Br. & H.).	Boosey & Co., Lond. BLDSC
	130	33 Variationenn über ein Thema von Beethoven (Br. & H.)	Breitkopf & Härtel, Wiesbaden, 8130
1872	131	Drei Stänchen (Br. & H.). (Trois Nocturnes).	Boosey & Co., Lond. BLDSC
	132	Zwei Polonaisen (Simrock)	
	133	Variationen über ein Thema von Beethoven (Sonate Op. 57). (Schlesinger).	
	134	Kleines Album (Simrock)	
1873	135	Deux Intermèdes de concert (Rieter-Biedemann.) Leipzig.	
	136	Im Walde (3. Folge; 6 Stücke) (Br. & H.).	S. H. 3 Augener & Co., London, BLDSC
	137	Tarantellen Nr. 6 E-moll und Nr. 7 G-Dur (Br. & H.)	E & S, S. H. 10-11, BLDSC
1874	138	Notenbuch für Klein und Gross (4 Hefte) (Simrock).	E. F. Kalmus, K03519
	139	3 Etuden (Br. & H.).	Ed. by C. Halle, Lond. BLDSC
1875	140	Voyage autour de ma chambre (5 Stücke) (Br. & H.).	Ed. by C. Halle, Lond. BLDSC
	141	4 Barkarolen (Br. & H.).	Forsyth Brothers, Lond. BLDSC
1877	142	Variationen über "Warum" von Schumann (Br. & H.).	
	143	4. Sonate in B-moll (Br. & H.).	
	144	2 Kapricen über Themen v. Mendelssohn: I. Fingalshöhle, II. Elfenmarsch (Br. & H.).	
	145	Ein Heft Walzer (Br. & H.).	

作曲年	作品番号	曲　名	備　考
	146	Sonatina C-Dur als Vorstudien zu den Sonaten der Meister (Kistner) (1878)	Ricordi 740 国立音大
	147	Sonatina D-Dur als Vorstudien zu den Sonaten der Meister (Kistner) (1878)	Henle, 341
1879	148	4 Mazurukas (Kistner).	
	149	3. Sonatine als Vorstudien zu den Sonaten der Meister (Kistner).	
	150	20 Präludien (2 Hefte) (Kistner).	
	151	2 Etuden (Kistner).	
	152	6 Walzer zu vier Händen (Kistner).	
	153	Auf Zeichnungen eines Einsamen (Kistner).	
	154	21 technische Studien als Vorbereitung zu den Werken von Fr. Chopin (Kistner).	
	155	Fabliau (Brandus, Paris).	Brandus, Paris, 12938 BLDSC
	156	Capricietto (Brandus).	Brandus, Paris, 12939 BLDSC
	157	3 Feuillets d'Album (Brandus).	Brandus, Paris, 12940 BLDSC
	158	Mazuruka in H-dur (Kistner).	

	作品番号のない作品
1844-51	Skizze (Bote & Bock).
	Esquise posthumes (3 Stücke) (Ashdown, London).
	6 Preludes posthumes (Ashdown).
	15 Melodies de Schubert (Transc.) (Brandus).
	Duo über Dom Sebastian von Donizetti (Mit Ernst) (Spina).
1845/3	Eglogue (Schott).
1845/7	Bagatelle sur une romance de Monpou (Schott).
1856	Prière : Andante (Rieter-Biedermann).
	Serenade A-moll (Bote & Bock).
1874-79	Etude in A-moll (Contained in "Ein Studienwerk").
	(Pest, Rozsavolgyi).
1885	Feuille de souvenir.

この作品表は，Ronald Earl Booth, Jr. の博士学位論文、〈The Life and Music of Stephen Heller〉1969（The University of Iowa，Ph. D., 1969 Music）所載の表によるものである。備考覧に筆者所有の版またはコピーとその出所を示しておいた。国立音大，大阪音大．BLDSC の記号はそれらの機関から提供されたコピーであることを示す。その他については現在入手可能な出版社名である。

なお, G. Henle 版の Stephen Heller, Ausgewählte Klavierwerke, Charakterstücke（G. Henle Verlag 372 München）には次の作品が収録されている。

Op. 29　La chasse・Die Jagd, Etude caractéristique
Op. 40　Zwei Stücke aus "Miscellanées"
　Nr. 2　La petite mendiante・Die kleine Bettlerin
　Nr. 3　Eglogue
Op. 79　Drei Stücke aus "Traumbilder", Nr. 4, Nr. 5, Nr. 6
Op. 80　Charakterstück　aus "Promenades d'un Solitaire・Wanderstunden", Nr. 2　Nach erquickender Rast
Op. 81　Vier Préludes aus "24 Préludes", Nr. 2, Nr. 15, Nr. 16, Nr.17
Op. 82　Morceau lyrique Nr.9 aus "Nuits blanches・ Blumen-, Frucht-und Dornenstücke"
Op. 121　Rêverie du Gondlier Nr. 3　aus "Trois Morceaux"
Op. 124　Drei Stücke aus "Scènens d'Enfants・ Kinderszenen, Nr. 1, Nr. 9, Nr. 10
Op. 128　Zwei Charakterstücke aus "Dans les Bois・Im Walde", Nr. 5　Légende de la Forêt・Waldsage, Nr. 6　Ecureuil poursuivi・Verfolgtes Eichhörnchen
Op. 134　Zwei Stücke aus "Petit Album・Kleines Album, Nr. 5 Questions・Fragen, Nr. 6　Réponse・Antwort
Op.138　Sieben Stücke aus "Album dédié à la Jeunesse・Notenbuch für Klein und Groß, Nr. 10　Enfant qui pleure・Weinendes Kind, Nr. 11　Ses camerades le consolent・Tröstende Kameraden, Nr. 16, Nr. 17, Nr. 18, Nr. 19, Nr. 20, Tziganyi (Bohémiens)・Zigeuner
Op. 150　Fünf Préludes aus "20 Préludes" Nr. 6, Nr. 7, Nr. 8, Nr. 10, Nr. 17